



■5/11・12「学習企画in茨城」報告

★当NPO法人主催のスタディツアーに初参加した20代の若者3人が感想を書いてくださったので、前半にその記事を載せています。あわせて後半の記事もお読みください。



「波崎未来フォーラムの遠藤さんの話を聞いて」

ツアー1日目、市民風車のお話から、私自身が想像していたよりも風力発電が低燃費であることと、多くの電力を生み出せることを知りました。はじめは火力発電などと比べると風力による電力供給は微々たるものではないのか？と考えていましたが、波崎の市民風車1機だけで1000世帯もの電力を供給していることに驚きました。CO2の削減と同時に風車を動かす燃料費や人件費がほとんどかからない点も大きな強みだといえます。

また、お話しの中で印象的だったのは、波崎の風車が市民の方や全国からの支援のもと建設されたということが非常に画期的だと感じました。電力というと、大企業が作るというイメージを持っていましたが、地域の人々や全国からの協力を経て、市民自ら電力を所有するということが新鮮でした。

市民風車の建設の背景には、建設費用である数億円というリスクのもとでプロジェクトが始まったといえます。計画を開始するまでには建設費というリスクをめぐってたくさんの議論があったことも伺いました。結果として、建設開始から10年以上経った現在になってようやく利益になることから、とても時間がかかるという大変さを知りました。一方で、そういった経験のもとでも「電力は地域でまかなえる」とおっしゃっていたことがとても印象的でした。大きなリスクの中でも、継続して行うことでプラスの結果がでたという経験に私自身も再生可能エネルギーへの展望をもつことができました。

市民風車の建設の経緯や現在に至るまでの話をとおして、未来への投資の大切さを学びました。目先のことだけでなく、先々のことを考えて何かに取り組むということは、次の世代の人だけでなく今生きる人にとっても良い影響を与えるのではないかと思います。リスクについても、一部の人だけでなくより多くの人々と共有することができれば、国全体で再生可能エネルギーへの転換を進めていくことも可能だと感じました。そのためには、一人一人が他人ごとではなく、どうしたら安全なエネルギーを供給できるのかという問題意識をもつことが大切だと実感しました。(加藤)



「東海第二原発をなくすためには」

ツアー2日目の午前、脱原発ネットワーク茨城の小川仙月さんのお話を聞きました。東海第二原発の問題点から、安全神話の転換、東海第二原発を止めるために何をすべきかなど、盛りだくさんでした。印象に残っている話としては、これまで『5重の壁』で守られているから安全だ」との安全神話が、「原発建屋内に放射性物質が漏れだしたら原発建屋が爆発する前に外に出してしまえ」という安全神話に転換されてしまったことに驚きました。もはや原発事故は起こりうることでと認めているといっても過言ではないと思いました。

これまで僕は大学時代に原発の危険性を学んだり被災者の話を聞いたりして、原発はなくしたほうがいいと思っていました。ただ、原発をなくしていく過程とその後（原発で働いている人の生活はどうするのか、電力はどう賄うのかなど）についてはほとんど学ぶことをせずいました。今回、小川さんの話を聞いて原発をなくすためには脱原発を主張するだけでは不十分だと感じました。東海第二原発を止めてしまうと経営している日本原子力発電株式会社（原電）が経営破綻してしまいます。東海第二原発をなくせとだけ言うことは簡単ですが、それでは原電の人たちの生活に関しては何も思いを馳せることをしておらず、無責任だと感じますし、脱原発にもなかなか進んでいかないと思います。だからこそ、原電は廃炉事業に専念してもらおうという小川さんの提案は原電のことも考えていると思ったし、脱原発に向かううえで原発をなくしていく過程とその後について考えていくことが大切だと気づきました。（杉山）



「賛成派でも反対派でもない人間の感じたこと」

今回、知人の誘いで学習企画に参加させて頂いた。私は、原子力発電や風力発電、その他の発電についての知識がテレビで得られる程度しか持っていなかった。「原子力発電は危険性が高い」と漠然とわかっている、何がどう危険なのかわかっていなかった。故に、原子力発電は「危険」ではあるが、今の日本の発電には、提供しているエネルギー量的に必要不可欠であり、今現在原子力発電で働いている人間がいる以上すぐに中止にするのは現実的ではないと思っていた。

2日目の午後、東海テラパークさんで色々とお話を伺い、特に印象的だったのは、職員の「ほかの発電方法で安定したエネルギーを提供できるようになるまでは、貢献していきたいと思っている。」という発言だ。この言葉を聞いた時、原子力発電で働いている人たちも十分に危険性を理解し、できれば他の発電方法を主流にしていきたいと考えているのではと感じた。

私も原子力発電に頼らなくても、再生可能エネルギーで安定したエネルギーを提供できる未来が早く来ればいいと思った。同時に、原子力発電に賛成派も反対派も、お互いに持っている知識をお互いの価値観を受け入れながら話し合いを進めることが一番の近道ではないかと考えた。世の中には、私のように原子力発電の危険性や再生可能エネルギーに興味を持ちながらも、実際には行動せず世間に流されていっている人間が多くいると思う。「発電」が自分たちの生きていく環境に大きく影響していると一人一人が認識できれば、再生可能エネルギーの発展も進むのではないかと思う。（佐藤）



「東海第2 原発の実態を視察、市民風車の挑戦を聞く」

去る5月11日、12日、視察合宿を行いました。今回の目玉は今ホットな東海第2原発の見学。運営会社は、2011年度からの8年間で発電がほぼゼロの日本原子力発電、大手電力5社から受け取った電気料金が計1兆円という会社です。日本で一番人口が密集している稼働40年の老朽炉です。その再稼働の正当性をどう説明するかが見ものでした。見学した「東海テラパーク」は日本で唯一の原発立地内にあるPR館です。視察前、「原発反対派はいないでしょうね」としつつ聞かれました。

(1日目)

午前中は恒例の観光。江戸の雰囲気土蔵造りの商家や町屋が軒を連ねている千葉県香取市佐原を、ボランティアガイドに説明してもらいました。実測日本地図を完成させた伊能忠敬の住んでいた地でもあります。伊能家の財を増やし50歳で隠居して天文学を学んだ忠敬は、私財をはたいてボランティアで16年間かけて志を遂げた人物です。



午後は「市民の力で風をエネルギーにした」波崎未来エネルギー風力発電所を見学し、「NPO法人波崎未来フォーラム」「一般社団法人波崎未来エネルギー」の理事の遠藤道章さんに同事務所で語ってもらいました。一般社団法人は茨城県神栖市で海岸清掃や青少年事業など地域活性化活動を行ってきたNPOが中心に発電事業を運営する非営利法人です。遠藤さんは株式会社港南運輸の専務取締役でもあります。38歳から活動をはじめ今56歳。2004年「取り戻そう美しい



鹿島灘、集まれ5千人の仲間たち」と、14台のバスで学生や地元の人たちを集め、清掃活動を行いました。「私たちはこの海岸清掃から学び、一人一人の力を実感し、こうした活動をする団体を作ろうと思いました。億単位の建設費のお金は調達できるのか、皆商売をやっているのに、お金を借りる苦労は知っていました。リスクを背負ってなんでやらなければならないのだという声もありました。お金も技術もない。でも、一人一人の行動を結集すれば、市民風車の原動力になると考えたのです」1口50万円。債務保証をとらない市民ファンドで集め「集まったことは衝撃的でした。名前しか分からない、全国の人とつながったのです」そして、「利益は地域のためにいいことに使うので、やらせてください」と市所有の駐車場に、

2007年HASAKI市民風車「なみまる」をついに完成させたのです。風車には全国から出資された



1000人以上の名前が記載されています。「風力発電が事業化されたことで、自己資金を蓄え、銀行借入ができる信用を得た」後、48kwから100kwまでの太陽光発電所6ヶ所を建設、更にソーラーシェアリングにも取り組んでいます。建設費合計6億4600万円。更に、講座活動、東日本大震災の支援活動、波崎自警団と業務連携してパトロール車両を提供するなど、活動を広げています。

理事 高橋 喜宣

(2日目)

午前中は、脱原発ネットワーク茨城代表・小川仙月さんから、東海第2原発再稼働の問題点を伺いま



した。事業主である日本原電は原発以外の事業を持たないため、再稼働できなければ破綻する以外ないこと、そのため2018年秋に運転開始40年を迎えた老朽原発が、技術的な視点からみると例外的な無理を重ねて運転延長審査、新規制基準審査を通過したこと等、詳細な資料に基づき丁寧なレクチャーを受けました。残り20年の稼働のために3000億円の経費をかけて再稼働をすすめるよりも、日本で最も長く原子力事業を担ってきた日本原電のポテンシャルを廃炉産業に向けて生き残らせ、商業原発を終わらせていくシナリオが望ましいとの小川さんの考えには深く納得させられました。

また、①新規制基準適合 ②地元合意 ③立地都道府県首長同意からなる原発事故後の再稼働要件について、東海第2では立地自治体である東海村だけでなく、周辺自治体を含む6市首長が議論を重ねて合意形成を図ったことは、結果はともかく、プロセスとして評価できるのではないかとこの視点も重要だと感じました。

レクチャー後、小川さんをご紹介くださった「生活クラブ生協・茨城」の大平さんと、「こつこつ測り隊」の吉江さんから日ごろの活動を発表していただきました。その後、活発な意見交換が行われました。

「若い世代の活動への反応はどうか」との質問には、「市民運動の場では年齢層が高い印象があるが、大学での出張授業等を通じてはたらきかけを試みている。自分はチェルノブイリ事故、一緒に活動しているメンバーは原発事故後、自分が栽培した農作物を出荷できず廃棄を強いられた経験が、強い活動への動機となっている。個人がもつ強い動機に注目し、丁寧に対話していくことが大切」という小川さんの言葉には、大きな学びを得ました。

美味しい海鮮ランチの後、最後の訪問先は東海原発PR施設「東海テラパーク」へ。1時間半をかけて東海第2原発の概要、福島原発事故後の災害・テロ対策強化事業について伺いました。事故後すべての原発が稼働停止したことで燃料輸入による膨大な国富流出が続いている、再エネは不安定さを避けられず蓄電技術が未発達であるため、現在では原発を基幹電源と位置付ける以外にない、等の主張には、メンバーからの鋭い疑問が出る一幕もありました。他方、原子力事故をありえないことと考えず、最悪の事態でも被害を最少に食い止めるための幾重もの安全対策を最重要課題とするよう原子力安全の考え方が大きく変化している



こと、事故後に高まった市民の懸念を十分に理解し相互理解をつくる努力を惜しまないとの考えから、丁寧に質問に応じる姿勢には誠実さが感じられました。原発から再生可能エネルギーにやがてシフトしていくことが望ましいと思う、との率直な意見には、原発事故が原子力産業従事者に与えたインパクトの大きさを実感しました。

屋上からは白波がたつ蒼い海が日差しに美しく映えました。3年後、高さ20mの防御壁に全敷地が囲まれ、海は全く見えなくなるそうです。巨費を投じる再稼働が、地域の風景を大きく変えてしまう、この国はその選択をしていることをあらためて痛感しました。毎回盛りだくさんのスタディツアーで、今回も多くの学びを得ることができ有意義な2日間でした。

政策検討チーム 鳥海 幸恵

■4/25、生活クラブ生協神奈川の視察を受け入れました



去る4月25日、当NPO法人の2号機を設置している「Coco-sezaki」の1階サロンをお借りし、生活クラブ生協神奈川環境平和委員会の視察見学を受け入れました。神奈川の組合員リーダー11人が参加され、私たちがどのような主旨や思いで立ち上げたのか、どのような人がどのような思いで関わっているのかなどをプロモーションビデオとパワポを使ってお話しさせていただきました。再生可能エネルギー、生活クラブでんきの共同購入運動、脱原発に関心が高いリーダー層のみなさんならではの鋭い質問が飛び交い、それに応えながら意見交換をしました。



その後、1号機を設置しているマンションへ、お天気も良かったので徒歩で移動しました。例によって危なげなハシゴを昇って、屋上の太陽光パネルを見学していただき、太陽光発電の設備について永田真一よりご説明し、またまた質問攻めでした。武蔵小杉の高層マンション群がよく見える川崎らしい景色と、私たちの活動にも感動されたご様子で、おおぜいの組合員へ発信していくお役に立てたなら嬉しいです。

副理事長 加藤 伸子

【編集後記】

今年のスタディツアーは茨城県・東海第2原発の施設見学をメインに組み立て、またもや大好評でした。特に、3人の若者が再生可能エネルギーについて熱心に学ぶ姿勢が頼もしく、感想文まで書いてくれて、苦労して企画した甲斐がありました。私自身も勉強になりましたし、大いにリフレッシュできました。やはり旅はいいものです♪(加藤伸子)

でん太通信は、ほぼ毎月15日に発行しています。

6月23日 13:30~ てくのかわさきにて、「第5回通常総会」を開催します

■NPO 法人 原発ゼロ市民共同かわさき発電所■

ホームページ

<http://genpatuzero-hatuden.jimdo.com/>

フェイスブック

<https://www.facebook.com/genpatuzero.hatuden>

連絡先 TEL 090-7948-6189 (川岸)

